

# ISSF 京都大会



**小野 俊彦**  
日新製鋼  
相談役



写真1

ISSF (国際ステンレス・スチール・フォーラム) の第11回大会が、2007年5月に京都で開催された。総会の参加者は当初予定の140名を大幅に上回る193名となった。この種のフォーラムの参加者規模としては、歴史に残る盛大なものとなった。幸いなことに「JAPAN-KYOTO」のビッグネームのためか、御婦人の参加が26名もあり、前年のアメリカ・ケンタッキー州レイビル開催の3倍になった。

会議は、5月17日から経済統計委員会、市場開発委員会、環境委員会、5月20日の年次総会・理事会、5月21日のオープン・パネル・セッション、Ni(ニッケル)協会との会合、Cr(クロム)協会との会合、5月22日のプラントツアーと、目白押しの日程で、急騰に歯止めがかからないNi問題や、中国の過剰鉄鋼生産能力問題、Cr製品の開発問題等、真剣な討議を重ねた。



写真2

ISSFはWSA(世界鉄鋼協会)と姉妹組織で、鉄鋼製品の中で急成長しているステンレスの需要分野を開拓するための情報交換の場として組織され、すべての会議は弁護士の同席を求めて、独占禁止法違反にならぬよう、十分に注意を払った運営をしている。

当時はNiがLME(ロンドン金属取引所)で1ポンドあたり25ドルにまで急騰したため、「いかにNi系に等しい質のCr系を開発するか」ということと、三井物産の多田副社長(当時)の提案された「ニッケル価格を鉄鉱石と同様にステンレスメーカーが直接山元(鉱山)と交渉し、長期の数量保証と年間価格契約方式に変更出来るか」ということが大きな話題になった。

(写真1)は、当時のISSFのボードメンバーで、向かって下段右から4人目がISSF会長の私で、私の右隣が次期会長のアルセロールミタル社のジレ社長。私の左隣が前期会長のアセリノックス社のムニョス会長。メンバーは、日本から3人、韓国1人、中国2人、欧州4人、南アフリカ1人、インド1人、事務局は2人、計14人。

(写真2)は、ホスト・カントリーのディナー会場で、純和風のパーティーのスナップ。

やはり国際交流では、女性の縁の下のサポートがいかに大切かを痛感させられた。